

関数解析学 練習問題 回答付き

hayami-m

1/1

例 0.0.1 (Banach space). $C[0, 1]$: $[0, 1]$ から C への連続関数全体のなす Banach space とする.

演習 0.0.1. $f \in C[0, 1]$ に対して次の条件を考える: f は実数値関数で次の等式を満たす

$$\int_0^{1/2} f(t)dt - \int_{1/2}^1 f(t)dt = 1$$

このような f をすべて集めた部分集合を $\mathcal{C} \subset C[0, 1]$ とする. 次の問いに答えよ.

1. $\mathcal{C} \subset C[0, 1]$: closed convex subset. である.
2. $\forall f \in \mathcal{C}, \|f\|_\infty \geq 1$
3. $\inf_{f \in \mathcal{C}} \|f\|_\infty = 1$ を示し, さらにこの \inf の値を実現する $f \in \mathcal{C}$ は存在しないことを示せ.

次の関数を考える (これは線形である):

$$\varphi : C[0, 1] \rightarrow \mathbb{R}, f \mapsto \int_0^{1/2} f(t)dt - \int_{1/2}^1 f(t)dt$$

1. $[\mathcal{C}: \text{convex}]$ $f, g \in \mathcal{C}, s \in [0, 1]$ とする. $sf + (1-s)g \in C[0, 1]$ であり, $\varphi(sf + (1-s)g) = s\varphi(f) + (1-s)\varphi(g) = 1$ となる. したがって, \mathcal{C} は convex.

$[\mathcal{C}: \text{closed}]$ $\{f_n\}_{n=1}^\infty$ を \mathcal{C} の cauchy sequence とすると, $C[0, 1]$ の completeness より, $\exists f \in C[0, 1]. f_n \xrightarrow{n \rightarrow \infty} f$: converge. i.e. $\forall \varepsilon > 0, \exists N \in \mathbb{N}, N \leq n \Rightarrow \|f - f_n\| < \varepsilon$. ここで,

$$\begin{aligned} |\varphi(f) - \varphi(f_n)| &= |\varphi(f - f_n)| \\ &\leq \left| \int_0^{1/2} (f(t) - f_n(t))dt \right| + \left| \int_{1/2}^1 (f(t) - f_n(t))dt \right| \\ &\leq \varepsilon \end{aligned}$$

$\varepsilon > 0$ は任意かつ $\varphi(f_n) = 1$ ($\forall n \in \mathbb{N}$) なので, $\varphi(f) = 1$. よって, $f \in \mathcal{C}$ であり, \mathcal{C} は closed. □

2. $f \in \mathcal{C}$ に対して,

$$\|f\|_\infty \geq \int_0^1 |f(t)|dt \geq \int_0^{1/2} |f(t)|dt + \int_{1/2}^1 |f(t)|dt \geq \int_0^{1/2} f(t)dt - \int_{1/2}^1 f(t)dt = 1$$

□

3. 次の条件を満たすようなリフト関数を考える.

$$f'_n(t) = \begin{cases} 1 & (0 \leq t \leq 1/2 - 1/n) \\ (t - \frac{1}{2})n & (1/2 - 1/n \leq t \leq 1/2 + 1/n) \\ -1 & (1/2 + 1/n \leq t \leq 1) \end{cases}, \quad f_n(t) = \frac{f'_n(t)}{\varphi(f'_n(t))}$$

すると $\varphi(f_n(t)) = 1$ i.e. $f_n \in \mathcal{C}$ であり, $\|f_n\|_\infty \xrightarrow{n \rightarrow \infty} 1$. つまり $\inf_{f \in \mathcal{C}} \|f\|_\infty = 1$ がわかる. 逆に $\|f\|_\infty = 1$ なる元 $f \in \mathcal{C}$ を取れば,

$$1 = \varphi(f) = \int_0^{1/2} f(t)dt - \int_{1/2}^1 f(t)dt \leq \int_0^{1/2} \|f\|_\infty dt - \int_{1/2}^1 -\|f\|_\infty dt = 1/2 + 1/2$$

となり, 等号成立のためには $f = \begin{cases} 1 & (0 \leq t \leq 1/2) \\ -1 & (1/2 \leq t \leq 1) \end{cases}$ となる必要があり矛盾. □

例 0.0.2. (Hilbert space) 数列空間 $l^2 = \{x \in \mathbb{C}^\infty; \sum_{n=0}^\infty |x_n|^2 < \infty\}$ は Hilbert space である.

演習 0.0.2. l^2 の自然な正規直行基底を $\{\delta_n\}_{n=1}^\infty$ とする. l^2 の有界点列を $\{x^{(n)}\}$ とする.

1. $x^{(n)} = \delta_{m, n_{m=1}^\infty}$ とすると, $\{x^{(n)}\}$ は 0 に弱収束する.
2. $K < \mathbb{N}$ として, $a = (a_k)_k \in l^\infty$ を次で定める.

$$a_k = \begin{cases} 1 & (k \leq K) \\ 0 & (k > K) \end{cases}$$

もし $\{x^{(n)}\}_{n=1}^\infty$ が 0 に弱収束すれば, $\lim_{n \rightarrow \infty} \|M_a x^{(n)}\|_2 = 0$ となることを示せ. ただし M_a は a による掛け算作用素である.

3. 任意の $a = (a_k)_k \in c_0$ に対して, 上と同じ結論が成り立つことを示せ.

1. $x^{(n)} = \delta_n$ とすると, $y = \{y_n\} \in l^2$ に対して, $\langle x^{(n)}, y \rangle = \overline{y_n}$ ここで, $y \in l^2$ より, $\lim_{n \rightarrow \infty} |y_n| = 0$ なので, 主張は示された. □

2.

$$M_a x^{(n)} = (a_k x_k^{(n)})_k = \begin{cases} x_k^{(n)} & 1 \leq k \leq K \\ 0 & K < k \end{cases}$$

主張を示すには, 十分大きな n を取れば任意の $1 \leq k \leq K$ について, $x_k^{(n)} = 0$ となることを示せばいい. そうでないとすると, $\langle x^{(n)}, \delta_k \rangle = x_k^{(n)} \neq 0$ となり, $\{x^{(n)}\}_{n=1}^\infty$ が 0 に弱収束することに反する. □

3. $b \in c_0$ について, ある $K \in \mathbb{N}$ があり, $b_k = 0 (k \leq K)$ といえる. この K について, 上の a をとると, $x \in l^2$ について,

$$M_b x = M_b M_a x, \quad \|M_b x\| \leq \|M_b\| \|M_a x\|$$

であるので, 上と同様のことが成り立つ. □

定義 0.0.3 (unitary representation). 可換群 G と Hilbert space \mathcal{H} と写像 $\pi : G \rightarrow \mathbf{B}(\mathcal{H})$ が次の条件を満たすとき, (π, \mathcal{H}) が G の unitary representation と言われる:

$$\begin{aligned} (\pi_g)^* &= \pi_{g^{-1}}, & \pi_g \circ \pi_h &= \pi_{gh} \quad (\forall g, h \in G) \\ \pi_e &= \text{id}_{\mathcal{H}} \quad (e \in G, \text{unit}) \end{aligned}$$

演習 0.0.3. 可算群 G に数え上げ測度を入れて測度空間とみなして, $l^2(G)$ を考える. 写像 $\pi : G \rightarrow \mathbf{B}(l^2(G))$, $g \mapsto \pi_g$ を次のように与える.

$$(\pi_g f)(h) = f(g^{-1}h), \quad f \in l^2(G), \quad g, h \in G$$

このとき, $(\pi, \mathbf{B}(l^2(G)))$ が G の unitary representation であることを示せ.

Proof. まずは任意の $g \in G$ に対して $\pi_g \in \mathbf{B}(l^2(G))$ であることを示そう. 線形性は明らかである.

$$\|f\|_2^2 = \sum_{h \in G} |f(h)|^2 = \sum_{g^{-1}h \in G} |f(g^{-1}h)|^2 = \|\pi_g(f)\|_2^2$$

であるから, π_g は等長であり, 特に有界である. 他の条件も見よう. $f_1, f_2 \in \mathbf{B}(l^2(G))$ について,

$$\langle \pi_g(f_1), f_2 \rangle = \sum_{h \in G} \pi_g(f_1)(h) \overline{f_2(h)} = \sum_{gh \in G} f_1(h) \overline{f_2(gh)} = \langle f_1, \pi_{g^{-1}}(f_2) \rangle$$

が成り立つ. また $f \in \mathbf{B}(l^2(G))$, $g, h, i \in G$ に対して,

$$(\pi_g \circ \pi_h)(f)(i) = \pi_g(\pi_h f(i)) = \pi_h f(g^{-1}i) = f(h^{-1}g^{-1}i) = \pi_{gh} f(i)$$

がなりたつ. $\pi_e = \text{id}_{l^2(G)}$ は明らかである. □

演習 0.0.4. 有限群 G に対して, 任意のユニタリ表現 $\pi : G \rightarrow \mathbf{B}(\mathcal{H})$ を考える. このとき, $P := \frac{1}{|G|} \sum_{g \in G} \pi_g$ は射影作用素であり, その像は次の集合と一致することを示せ:

$$\mathcal{H}^G := \{x \in \mathcal{H} \mid \forall g \in G, \pi_g(x) = x\}$$

Proof. まずは射影作用素であることを確認しよう:

$$P^2 = \frac{1}{|G|^2} \sum_{g, h \in G} \pi_{gh} = \frac{1}{|G|^2} \sum_{g \in G} |G| \pi_g = P$$

$P(\mathcal{H}) \supseteq \mathcal{H}^G$ は明らかなので, 逆を示す. $x \in P(\mathcal{H})$ とすると, $x = P(x) = \frac{1}{|G|} \sum_{g \in G} \pi_g(x)$ である. 任意の $h \in G$ に対して,

$$\pi_h(x) = \pi_h(P(x)) = \frac{1}{|G|} \sum_{g \in G} \pi_h \pi_g(x) = \frac{1}{|G|} \sum_{hg \in G} \pi_{hg}(x) = P(x) = x$$

となるので, $x \in \mathcal{H}^G$ である. □

定義 0.0.4 (unitary equivalent). \mathcal{H}, \mathcal{K} : Hilbert space, $A \in \mathbf{B}(\mathcal{H}), B \in \mathbf{B}(\mathcal{K})$

A, B : unitary equivalent : $\stackrel{\text{def}}{\iff} \exists! u : \mathcal{H} \rightarrow \mathcal{K}$ unitary operator. ($UA = BU$)

演習 0.0.5. $\mathbb{T} = \mathbf{R}/2\pi\mathbf{Z}$ 上のルベーク可測関数空間 $L^p(\mathbb{T})$ ($1 \leq p \leq \infty$) を考える. 各 $n \in \mathbf{Z}$ について $e_n(t) := e^{int}$, $t \in [0, 2\pi)$ と定める. 閉部分空間

$$H^2(\mathbb{T}) := \overline{\text{span}\{e_k; \}_{k=0}^{\infty}} \subset L^2(\mathbb{T})$$

に対応する直交射影写像を P_+ とする. 以下が成り立つ.

1. $\{e_n\}_{n \in \mathbf{Z}}$ は $L^2(\mathbb{T})$ の正規直交基底である.
2. $e_1(t) = e^{int}$ による $L^2(\mathbb{T})$ の掛け算作用素 M_{e_1} は $l^2(\mathbf{Z})$ の両側ずらし作用素 U と unitary equivalent である.
3. $f \in L^\infty(\mathbb{T})$ に対して, $T_f \in \mathbf{B}(H^2(\mathbb{T}))$ を,

$$T_f h = P_+ f h, \quad h \in H^2(\mathbb{T})$$

と定める. このとき, T_{e_1} と l^2 の片側ずらし作用素 V は unitary equivalent である.

2. $\rho: l^2(\mathbb{T}) \rightarrow L^2(\mathbb{T})$ を, $\{a_n\}_{n \in \mathbf{Z}} \mapsto \sum_{n=-\infty}^{\infty} a_n e_n$ と定める. これは明らかに unitary であり,

$$\rho U(\{a_n\}) = \rho(\{a_{n-1}\}) = \sum_{n=-\infty}^{\infty} a_{n-1} e_n = \sum_{n=-\infty}^{\infty} a_n e_{n+1} = M_{e_1} \rho(\{a_n\})$$

より $\rho U = M_{e_1} \rho$ であって, unitary equivalent であることがわかった. \square

3. $f = \sum_{n=0}^{\infty} a_n e_n \in H^2(\mathbb{T})$ とする. $T_{e_1} f = \sum_{n=0}^{\infty} a_n e_{n+1}$ なので, $T_{e_1} \rho(\{a_n\}) = \sum_{n=0}^{\infty} a_n e_{n+1} = \rho V(\{a_n\})$ \square

定義 0.0.5 (uniformly convex). Banach space X が一様凸 (uniformly convex) とは, 次が成り立つことである:

$$\forall \varepsilon > 0, \exists \delta > 0. (\forall x, y \in B_X, \|x - y\| \geq \varepsilon \Rightarrow \left\| \frac{x + y}{2} \right\| \leq 1 - \delta)$$

特に Hilbert space は uniformly convex である.

演習 0.0.6. X : Banach space, $\{x_n\}_{n=1}^{\infty}$: sequence of X , weakly converges to $x \in X$ する. 次が成り立つことを示せ.

1. $\|x\| \leq \liminf_{n \rightarrow \infty} \|x_n\|$
2. X : uniformly convex and $\lim_{n \rightarrow \infty} \|x_n\| = \|x\| \Rightarrow \lim_{n \rightarrow \infty} \|x_n - x\| = 0$

1. 次の Hahn-Banach の拡張定理からの補題を利用する.

Cor

Banach space X , $x \in X$ について, $\varphi \in X^*$ で, $\|\varphi\| = 1$ かつ $\varphi(x) = \|x\|$ なるものが存在する.

弱収束の仮定から, この φ に対して, 次のことがいえる:

$$\forall \varepsilon > 0, \exists N \in \mathbf{N}, N \leq n \Rightarrow |\varphi(x) - \varphi(x_n)| < \varepsilon$$

またここで $\|\varphi\| = 1$ より $|\varphi(x_n)| \leq \|x_n\|$ ($\forall n \in \mathbf{N}$) が成り立つ.

したがって、十分小さな ε とそれに対応する十分大きな N を取れば、 $N \leq n$ で、 $-\varepsilon + \|x\| < |\varphi(x_n)| \leq \|x_n\|$ が成り立つ。

したがって、 $-\varepsilon + \|x\| < \inf_{N \leq n} \|x_n\|$ である。 ε は任意であるから、次が言える。

$$\|x\| \leq \liminf_{n \rightarrow \infty} \|x_n\|$$

□

2. 背理法で示す。 $y_n := x_n / \|x_n\|, x := x / \|x\|$ とし、 $\lim_{n \rightarrow \infty} \|y - y_n\| \neq 0$ と仮定する。任意の $\varepsilon > 0$ に対して、 $\{y_n\}_{n=1}^{\infty}$ の部分列 $\{y_{n_j}\}_{j=1}^{\infty}$ を取れば、

$$\|y - y_{n_j}\| \geq \varepsilon \quad (j \in \mathbb{N})$$

とできる。 X は uniformly convex space であるから、ある $\delta > 0$ があり、

$$\|y + y_{n_j}\| \leq 2(1 - \delta)$$

が成り立つ。先程用いた補題を再び使って、 $\|\varphi\| = 1, \varphi(y) = \|y\| = 1$ なる $\varphi \in X^*$ を取れば、仮定より $\{y_{n_j}\}$ は $\{y\}$ に弱収束するので、 $\lim_{n \rightarrow \infty} \varphi(y + y_{n_j}) = 2$ である。ここで、次の式が成り立つ：

$$|\varphi(y + y_{n_j})| \leq \|\varphi\| \|y + y_{n_j}\| \leq 2(1 - \delta) < 2 \quad (\forall j \in \mathbb{N})$$

これは矛盾であり、仮定は誤り。したがって、 $\lim_{n \rightarrow \infty} \|y_n - y\| = 0$

□

定義 0.0.6. • $C_c(\mathbf{R})$: \mathbf{R} 上のコンパクト台を持つ連続関数全体の集合とする。

• $L^p(\mathbf{R})$: \mathbf{R} 上のルベーグ測度に関する L^p 空間とする。

ここで、 $C_c(\mathbf{R}) \subset L^p(\mathbf{R})$ は L^p -dense である。

演習 0.0.7. 可測関数 $f : \mathbf{R} \rightarrow \mathbf{R}$ と $t \in \mathbf{R}$ に対して、平行移動した関数 f^t を次で定める：

$$f^t(s) = f(s - t), \quad s \in \mathbf{R}$$

$1 \leq p \leq \infty, t \in \mathbf{R}$ について、 L^p 空間上の作用素 $U_t \in B(L^p(\mathbf{R}))$ を

$$U_t f = f^t, \quad f \in L^p(\mathbf{R})$$

と定める。次を示せ。

1. U_t : isometry

2. \mathbf{R} の 0 に収束する点列 $\{t_n\}_{n=1}^{\infty}$ と任意の $f \in L^p(\mathbf{R})$ に対して次が成り立つ：

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \|U_{t_n} f - f\|_p = 0$$

つまり強作用素位相に対して連続である。

3. \mathbf{R} の無限大に発散する点列 $\{t_n\}_{n=1}^{\infty}$ と任意の $f, g \in L^2(\mathbf{R})$ に対して次が成り立つ：

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \langle U_{t_n} f, g \rangle_{L^2} = 0$$

つまり弱作用素位相に対して連続である。

$$1. \|U_t f\|_p^p = \int_{\mathbf{R}} |f(s-t)|^p ds = \int_{\mathbf{R}} |f(s)|^p ds = \|f\|_p^p \quad \square$$

2. $C_c(\mathbf{R}) \subset L^p(\mathbf{R})$ は L^p -dense であるから, $f \in C_c(\mathbf{R})$ に対して示せば十分. コンパクト集合上の連続関数は一様連続であることに注意する. $\lim_{n \rightarrow \infty} t_n = 0$ であるから,

$$\forall \varepsilon > 0, \exists N \in \mathbf{N}. N \leq n \implies \forall s \in \text{Supp } f. |f(s-t_n) - f(s)| < \varepsilon$$

とかける. したがって, この記号をそのまま用いれば,

$$\|U_{t_n} f - f\|_p^p = \int_{\mathbf{R}} |f(s-t_n) - f(s)|^p ds \leq \int_{\text{Supp } f} \varepsilon^p ds + 2|t_n| \|f\|_{\infty}^p$$

とかける. $\varepsilon > 0$ は任意より, $\lim_{n \rightarrow \infty} \|U_{t_n} f - f\|_p = 0$ がわかった. \square

3. $C_c(\mathbf{R}) \subset L^2(\mathbf{R})$ は L^2 -dense より, $g \in C_c(\mathbf{R})$ に対して示せば十分である. このとき, $\text{Supp } g$ は bounded なので, 十分大きな $M \in \mathbf{R}_{\geq 0}$ を取れば, $\text{Supp } g \subset [-M, M]$ とできる. また, $f \in L^2(\mathbf{R})$ なので, $\|U_{t_n} f\|_2^2 < \infty$ であって, 特に, $\forall \varepsilon > 0, \exists M \in \mathbf{R}_{\geq 0}. |(\int_{\mathbf{R}} - \int_{-M}^M) (|f(x)|^2) dx| < \varepsilon$ が成り立つ. 特に, $\forall x \in \mathbf{R} \setminus [-M, M]. |f(x)| < \varepsilon^{\frac{1}{2}}$ である. 上の 2 つのうち大きな方の M に揃えて, $N \in \mathbf{N}. N \leq n \implies t_n > 2M$ なる N を取ると, $N \leq n$ において,

$$\begin{aligned} \langle U_{t_n} f, g \rangle &= \int_{\mathbf{R}} f(s-t_n) \overline{g(s)} ds = \int_{\text{Supp } g} f(s-t_n) \overline{g(s)} ds \\ &\leq \varepsilon^{\frac{1}{2}} \int_{\text{Supp } g} \overline{g(s)} ds \quad (\because s-t_n \notin [-M, M]) \end{aligned}$$

ここで, $\varepsilon > 0$ の任意性から, $\lim_{n \rightarrow \infty} \|U_{t_n} f - f\|_p = 0$ が言えた. \square

定義 0.0.7 (Dirichlet Kernel). $n \in \mathbf{N}, t \in [-\pi, \pi]$ に対して, Dirichlet Kernel $D_n(t)$ を次のように定める.

$$D_n := \frac{\sin((n + \frac{1}{2})t)}{\sin \frac{t}{2}}$$

加法定理を用いると次のように変形できる.

$$D_n(t) = \frac{\sin((n + \frac{1}{2})t)}{\sin \frac{t}{2}} = 1 + w \sum_{k=1}^n \cos kt = \sum_{k=-n}^n e^{ikt}$$

演習 0.0.8. $\varphi_n(f) : C(\mathbb{T}) \rightarrow \mathbf{C} : \text{linear map}$ を次のように定める.

$$\varphi_n(f) = \frac{1}{2\pi} \int_{-\pi}^{\pi} f(t) D_n(t) dt, \quad (f \in C(\mathbb{T}))$$

このとき, 次のことを示せ.

1. $\forall n \in \mathbf{N}. \|\varphi_n\| = \|D_n\|_1$
2. $\{\|D_n\|_1\}_{n=1}^{\infty}$ は非有界.
3. $\{\varphi_n(f)\}_{n=1}^{\infty}$ が有界でないような $f \in C(\mathbb{T})$ が存在する.

1. 任意の $\varepsilon > 0$ に対して, 連続関数 $f_\varepsilon : \mathbf{R} \rightarrow \mathbf{R}$ を,

$$f_\varepsilon(t) = \begin{cases} -1 & t < -\varepsilon \\ \frac{t}{\varepsilon} & -\varepsilon \leq t \leq \varepsilon \\ 1 & t > \varepsilon \end{cases}$$

と定める. このとき,

$$\begin{aligned} \|D_n\|_1 &= \frac{1}{2\pi} \int_{-\pi}^{\pi} |D_n(t)| dt = \frac{1}{2\pi} \int_{|D_n(t)| > \varepsilon} |D_n(t)| dt + \frac{1}{2\pi} \int_{|D_n(t)| \leq \varepsilon} |D_n(t)| dt \\ &= \frac{1}{2\pi} \int_{|D_n(t)| > \varepsilon} f_\varepsilon(D_n(t)) D_n(t) dt \\ &\quad + \frac{1}{2\pi} \int_{|D_n(t)| \leq \varepsilon} f_\varepsilon(D_n(t)) D_n(t) dt + \frac{1}{2\pi} \int_{|D_n(t)| \leq \varepsilon} |D_n(t)| \left(1 - \frac{|D_n(t)|}{\varepsilon}\right) dt \\ &\leq \frac{1}{2\pi} \int_{-\pi}^{\pi} f_\varepsilon(D_n(t)) D_n(t) dt + \varepsilon \leq \|\varphi_n\| + \varepsilon \end{aligned}$$

がわかる. 任意の $\varepsilon > 0$ について上式は成り立つので, $\|D_n\|_1 \leq \|\varphi_n\|$ がわかった.

$$\|\varphi_n\| \leq \frac{1}{2\pi} \int_{-\pi}^{\pi} |D_n(t)| dt = \|D_n\|_1 \text{ は明らか.}$$

□

2. 有名不等式を用いて, つぎのように変形できる.

$$\|D_n\|_1 = \frac{1}{\pi} \int_0^\pi \left| \frac{\sin((n + \frac{1}{2})t)}{\sin(\frac{t}{2})} \right| dt \geq \frac{2}{\pi} \int_\pi^{n\pi} \frac{|\sin s|}{s} ds$$

簡単な計算により, 右辺は無限大に発散することがわかる. (具体的には $\frac{2}{\pi} \sum_{k=1}^{n-1} \frac{2}{(k-1)\pi}$ でなどで下から抑えられる.)

□

3. 1 と 2 の結果と, 次の定理の対偶より直ちに従う.

— 様有界性原理 —

$\{T_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$: family of bounded operators between Banach space X, Y

$$\forall x \in X. \sup_{\lambda \in \Lambda} \|T_\lambda x\| < \infty \implies \{\|T_\lambda\|\}_{\lambda \in \Lambda} : \text{bounded}$$

□

演習 0.0.9. \mathcal{H} : Hilbert space, $T \in B(\mathcal{H}), n \in \mathbf{N}$ に対して,

$$A_n(T) = \frac{1}{n} \sum_{k=0}^{n-1} T^k$$

と定めたとき, 次が成り立つ.

1. $\{\|T^n\|\}_{n=1}^\infty$ が有界とする. このとき任意の $x \in \overline{R(I-T)} \subset \mathcal{H}$ に対して, $\lim_{n \rightarrow \infty} \|A_n(T)x\| = 0$
2. $U \in B(\mathcal{H})$ がユニタリ作用素とする. $P \in B(\mathcal{H})$ を $\ker(I-U)$ への射影作用素とする. このとき任意の $x \in \mathcal{H}$ に対して, $\lim_{n \rightarrow \infty} \|A_n(U)x - Px\| = 0$

1. $\{\|T^n\|\}_{n=1}^\infty$ が有界とする. $\|A_n(T)\| \leq \frac{1}{n} \sum_{k=0}^{n-1} \|T^k\| \leq \sup_{0 \leq k \leq n-1} \|T^k\|$ であるから, 任意の $n \in \mathbb{N}$ に対して, $A_n(T)$ は有界である. $x \in R(I - T)$ とすると, $\exists y \in \mathcal{H}. x = (I - T)(y)$ である. したがって,

$$\|A_n(T)x\| = \left\| \frac{1}{n}(I - T^n)(y) \right\| \leq \frac{1}{n}(1 + \|T^n\|)\|y\|$$

であり, $\lim_{n \rightarrow \infty} \|A_n(T)x\| = 0$. 次に $x \in \overline{R(I - T)}$ とすると, \mathcal{H} の有界列 $\{y_n\}$ があり, $x = \lim_{n \rightarrow \infty} (I - T)(y_n)$ である. つまり $\forall n, \exists K \in \mathbb{N}. K \leq k \Rightarrow \|x - (I - T)y_k\| < 1/n$ である. このような $K \leq k$ を取れば,

$$\begin{aligned} \|A_n(T)x\| &= \|A_n(T)(x - (I - T)y_k)\| + \|A_n(T)(I - T)y_k\| \\ &\leq \|A_n(T)\| \|x - (I - T)y_k\| + \frac{1}{n}(1 + \|T^n\|)\|y_k\| \\ &\leq \frac{1}{n} \sup_{0 \leq l \leq n-1} \|T^l\| + \frac{1}{n}(1 + \|T^n\|)\|y_k\| \end{aligned}$$

したがって, $n \rightarrow \infty$ とすると右辺は 0 に収束する. □

2. U はユニタリ作用素であるから, $\overline{R(I - U)}^\perp = \ker(I - U^*) = \ker(I - U)$ に注意する. したがって特に $\mathcal{H} = \overline{R(I - U)} \oplus \ker(I - U)$ となる. $z \in \ker(I - U)$ とすれば, $z = Uz$ なので, $A_n(U)z = z$ である. ここで, $x \in \mathcal{H}$ に対して, $z = P(x), y = x - P(x)$ とすれば,

$$A_n(U)x - Px = A_n(U)(y + z) - z = A_n(U)y$$

であり, また U はユニタリより $\{U^n\}_{n=0}^\infty$ は有界なので, 先に示したことを用いれば題意が示せる. □